

伝吉の敵打ち

芥川龍之介

青空文庫

これは孝子伝吉の父の仇あだを打った話である。

伝吉は信州しんしゅう水内郡みちのちごおり笹山ささやま村の百姓の一人息子ひとりむすこである。伝吉の父は伝三と云い、

「酒を好み、博奕ばくちを好み、喧嘩けんか口論くろんを好」んだと云うから、まず一村いっそんの人々にはならず

もの扱いをされていたらしい。(註一)母は伝吉を産うんだ翌年、病死してしまつたと云うものもある。あるいはまた情夫じょうふの出来たために出奔してしまつたと云うものもある。

(註二)しかし事實はどちらにしろ、この話の始まる頃にはいなくなっていたのに違ちがいな

この話の始まりは伝吉のやつと十二歳になつた(一説によれば十五歳)天保七年てんぽうの春である。伝吉はある日ふとしたことから、「越後浪人えちごろうにん服部平四郎はっとりへいしろうと云えるものの怒いかりを買かひ、あわや斬きりも捨てられん」とした。平四郎は当時文蔵ぶんぞうと云う、柏原かしわばらの博徒ばくとのもとに用心棒しんぱんをしていた剣客けんかくである。もつともこの「ふとしたこと」には二つ三つ異説いせつのない訣わけでもない。

まず田代玄甫たしろげんぽの書いた「旅硯たびすずり」の中の文によれば、伝吉は平四郎の鬚まげぶしへ風たこをひつけたと云うことである。

なおまた伝吉の墓のある笹山村の慈照寺（浄土宗）は「孝子伝吉物語」と云う木版のしょうさつし小冊子を頒わかつてゐる。この「伝吉物語」によれば伝吉は何もした訣ではない。ただその釣つりをしている所へ偶然来かつた平四郎に釣道具を奪われようとしただけである。最後に小泉孤松こいずみこうしょうの書いた「農家義人伝のうかぎじんでん」の中の一編によれば、平四郎は伝吉の牽ひいていた馬に泥田どろたへ蹴落けおとされたと云うことである。（註三）

とにかく平四郎は腹立ちまぎれに伝吉へ斬りかけたのに違いない。伝吉は平四郎に追われながら、父のいる山畠やまばたへ逃げのぼつた。父の伝三はたった一人山畠の桑の手入れをしていた。が、子供の危急ききゆうを知ると、芋いもの穴の中へ伝吉を隠した。芋の穴と云うのは芋を囲かこう一畳敷ばかりの土室つちむろである。伝吉はその穴の中に俵わらの藁わらをかぶつたまま、じつと息をひそめていた。

「平四郎たちまち追い至り、『老爺おやじ、老爺、小僧はどちへ行つたぞ』と尋ねけるに、伝三もとよりしたたかものなりければ、『あの道を走り行き候』とぞ欺あざむきける。平四郎その方へ追いかんとせしが、ふと伝三の舌を吐はきたるを見咎みとがめ、『土百姓どびやくしやうめが、大胆だいたんにも□□□□□□□□□□（虫食いのために読み難し）とて伝三を足蹴あしげにかけければ、不敵の伝三腹を据すえ兼ね、あり合う鋏くわをとるより早く、いざさらば土百姓の腕を見せんとぞ

息まきける。

「いずれ劣らぬ曲者^{くせもの}ゆえ、しばらく（シの誤か）は必死に打ち合いけるが、……

「平四郎さすがに手だれなりければ、思うままに伝三を疲らせつつ、打ちかかる鍬を引きはずすよと見る間に、伝三の肩さきへ一太刀浴びせ、……

「逃げんとするを逃がしもやらず、拝^{おが}み打ちに打ち放し、……

「伝吉のありかには気づかずありけん、悠々と刀など押し拭い、いずこともなく立ち去りけり。」（旅^{たび}硯^{すずり}）

脳^{のう}貧^{ひん}血^{けつ}を起した伝吉のやつと穴の外へ這^はい出した時には、もうただ芽をふいた桑の根がたに伝三の死骸^{しかい}のあるばかりだった。伝吉は死骸にとりすがったなり、いつまでも一人じつとしていたが、涙は不思議にも全然睫毛^{まつげ}を沾^{うる}さなかつた。その代りにある感情の火のように心を焦^こがすのを感じた。それは父を見殺しにした彼自身に対する怒だった。理^{こと}が非でも仇^{あだ}を返さなければ消えることを知らない怒だった。

その後の伝吉^ごの一生はほとんどこの怒のために終始したと云つてもよい。伝吉は父を葬^{ほうむ}つた後、長^{なが}窪^{くぼ}にいる叔父^{おじ}のもとに下男^{げなん}同様に住みこむことになった。叔父は枳^{ます}屋^や善^{ぜん}作^{さく}（一説によれば善兵衛^{ぜんべゑ}）と云う、才^{さい}覚^{かく}の利^きいた旅籠^{はたご}屋^やである。（註四）伝吉は下男部屋

に起臥きがしながら仇打ちあだうの工夫くふうを凝らしつづけた。この仇打の工夫についても、諸説のいずれが正しいかはしばらく疑問に附するほかはない。

(一) 「旅硯」、「農家義人伝」等によれば、伝吉は仇の誰であるかを知っていたことになっている。しかし「伝吉物語」によれば、服部平四郎はっとりへいしろうの名を知るまでに「三星霜せいそうをけみ閲し」たらしい。なおまた皆川みながわ鯛庵ちようあんの書いた「木の葉こは」の中の「伝吉がこと」も「数年を経たり」と断ことわっている。

(二) 「農家義人伝」、「本朝ほんちよう姑妄聴こもうちよう」(著者不明)等によれば、伝吉の剣法けんぼうを学んだ師匠は平井左門ひらいさもんと云う浪人ろうにんである。左門は長窪の子供たちに読書や習字を教えながら、請うものには北辰夢想流ほくしんむそうりゆうの剣法も教えていたらしい。けれども「伝吉物語」「旅硯」「木の葉」等によれば、伝吉は剣法を自得じとくしたのである。「あるいは立ち木かたぎをかたぎと呼び、あるいは岩を平四郎と名づけ」、一心に練磨れんまを積んだのである。

すると天保てんぽう十年頃意外にも服部平四郎は突然往くえを晦くちましてしまった。もつともこれは伝吉につけ狙ねらわれていることを知ったからではない。ただあらゆる浮浪人のようにどこかへ姿を隠してしまったのである。伝吉は勿論落胆らくたんした。一時は「神ほとけもかたき讐の上を守らせ給うか」とさえ歎息した。この上仇あだを返そうとすればまず旅に出なければならな

い。しかし当てもない旅に出るのは現在の伝吉には不可能である。伝吉は烈しい絶望の余り、だんだん遊蕩ゆうとうに染まり出した。「農家義人伝」はこの変化を「交まじわりを博徒ばくとに求む、蓋けだし讐かたきの所在を知らんと欲する也」と説明している。これもまたあるいは一解釈かも知れない。

伝吉はたちまち枅屋ますやを逐おわれ、唐丸とうまるの松まつと称された博徒松五郎まつごろうの乾児こぶんになった。爾じ来らいほとんど二十年ばかりは無頼ぶらいの生活を送っていたらしい。(註五)「木の葉」はこの間あいだに伝吉の枅屋の娘を誘拐ゆうかいしたり、長窪ながくぼの本陣ほんじん何某ゆすりへ強請ゆすりに行ったりしたことを伝えている。これも他の諸書に載せてないのを見れば、軽々けいけいに真偽しんぎを決することは出来ない。現に「農家義人伝」は「伝吉、一いっき郷きょうの悪あく少しょうと共に屢横逆しばしばうげきを行えりと云う。妄もうた誕たん弁べんずるに足らざる也。伝吉は父讐ふしゆうを復せんとするの孝子、豈あに、這般しやはんの無状ぶじようあらんや」と「木の葉」の記事を否定している。けれども伝吉はこの間も仇打ちの一念は忘れなかつたのであろう。比較的伝吉に同情を持たない皆川蝸庵みながわちようあんさえこう書いている。

「伝吉は朋輩ほうばいどもには仇あることを云わず、仇あることを知りしものには自らも仇の名など知らざるように装よそおいしとなり。深志しんしあるものの所作しよさくなるべし。」が、歲月いたまは徒たずらに去り、平四郎の往くえは不相変誰の耳にもはいらなかつた。

すると安政^{あんせい}六年の秋、伝吉はふと平四郎の倉井村^{くらい}にいることを発見した。もつとも今度は昔のように両刀を手挟^{たばさ}んでいたのではない。いつか髪^{かみ}を落した^{のち}後、倉井村の地蔵堂^{じぞうどう}の堂守^{どうもり}になつていたのである。伝吉は「冥助^{みょうじよ}のかたじけなさ」を感じた。倉井村と云えば長窪から五里に足りない山村^{さんそん}である。その上笹山^{ささやま}村に隣り合っているから、小徑^{みち}も知らないのは一つもない。(地図参照) 伝吉は現在平四郎の浄観^{じようかん}と云つているのも確かめた上、安政六年九月七日、萱笠^{すげがさ}をかぶり、旅合羽^{たびがっぱ}を着、相州無銘^{そうしゅうむめい}の長脇差^{ながわきさし}をさし、たつた一人仇打ちの途^とに上つた。父の伝三の打たれた年からやつと二十三年目に本懐^{ほんかい}を遂げようとするのである。

伝吉の倉井村へはいったのは戌^{いぬ}の刻^{こく}を少し過ぎた頃だった。これは邪魔^{じゃま}のはいらないためにわざと夜を選んだからである。伝吉は夜寒^{よさむ}の田舎道^{いなかみち}を山のかげにある地藏堂へ行つた。窓障子^{まどしようじ}の破れから覗^{のぞ}いて見ると、櫓^{ぼたあか}明りに照された壁の上に大きい影が一つ映^{うつ}っていた。しかし影の持主は覗^{のぞ}いている角度の關係上、どうしても見ることは出来なかった。ただその大きい目^{もく}前^{ぜん}の影は疑う余地のない坊主頭^{ぼうずあたま}だった。のみならずしばらく聞き澄ましていても、この佻^{わび}しい堂守^{どうもり}のほかに人のいるけはいは聞えなかった。伝吉はまず雨^{あめ}落ち^{まお}の石へそつと萱笠^{すげがさ}を仰向^{あおむ}けに載せた。それから静かに旅合羽^{たびがっぱ}を脱ぎ、二つに畳^{たた}ん

だのを笠の中に入れた。笠も合羽もいつの間にかしつとりと夜露よつゆにしめっていた。すると、
 ——急に便通を感じた。伝吉はやむを得ず藪やぶかげへはいり、漆うるしの木の下へ用したを足した。この
 一条を田代玄甫たしろげんぽは「胆きもの太きこそ恐ろしけれ」と称たえ、小泉孤松こいずみこしょうは「伝吉の沈勇、
 極まれり矣」と嘆じている。

身仕度みじたくを整えた伝吉は長脇差ながわきざしを引き抜いた後のち、がらりと地藏堂の門障子かどしやうじをあけた。
 囲炉裡いろりの前には坊主が一人、楽々らくらくと足を投げ出していた。坊主はこちらへ背を見せたま
 ま、「誰じやい？」とただ声をかけた。伝吉はちよいと拍子抜けひょうしぬを感じた。第一にこう
 云う坊主の態度は仇あだを持つ人とも思われなかった。第二にその後ろ姿は伝吉の心に描えがいて
 いたよりもずっと憔悴しょうすいを極めていた。伝吉はほとんど一瞬間人違いではないかと云う
 疑いさえ抱いた。しかしもう今となつてはためらつていられないのは勿論だった。

伝吉は後ろ手に障子をしめ、「服部平四郎はっとりへいしろう」と声をかけた。坊主はそれでも驚きもせ
 ずに、不審ふしんそうに客を振り返つた。が、白刃しらばの光りを見ると、咄嗟とつさに法衣ころもの膝ひざを起した。
 榎火ほたびに照らされた坊主の顔は骨と皮ばかりになった老人だった。しかし伝吉はその顔のど
 こかにはつきりと服部平四郎を感じた。

「誰じやい、おぬしは？」

「伝三の倅せがれの伝吉だ。怨みはおぬしの身に覚えがあるだろう。」

浄観じょうかんは大きい目をしたまま、黙然もくねんとただ伝吉を見上げた。その顔に現れた感情は

何とも云われない恐怖きょうふだった。伝吉は刀を構えながら、冷やかにこの恐怖を享樂した。

「さあ、その伝三の仇あだを返しに来たのだ。さっさと立ち上つて勝負をしろ。」

「何、立ち上れじや?」

浄観は見る見る微笑びしょうを浮べた。伝吉はこの微笑の中に何か妙に凄すこいものを感じた。

「おぬしは己おれが昔のように立ち上れると思うているのか? 己は居いざりじや。腰抜けじや

。」

伝吉は思わず一足ひとあしすさつた。いつか彼の構えた刀はぶるぶる切先きつさきを震ふるわしていた。

浄観はその容ようす子を見やつたなり、齒の抜けた口をあからさまにもう一度こうつけ加えた。

「立ち居さえ自由にはならぬ体じや。」

「嘘うそをつけ。嘘を……」

伝吉は必死ののしに罵りかけた。が、浄観は反対に少しずつ冷静に返り出した。

「何が嘘じや? この村のものにも聞いて見るが好よい。己は去年の大患おおわずらいから腰ぬけ

になつてしもうたのじや。じやが、——」

浄観はちよいと言葉を切ると、まともに伝吉の目の中を見つめた。

「じゃが己おれは卑怯ひきようなことは云わぬ。いかにもおぬしの云う通り、おぬしの父親てておやは己の手にかけた。この腰抜けでも打つと云うなら、立派りっぱに己は打たれてやる。」

伝吉は短い沈黙あいだの間にいろいろの感情の群むらがるのを感じた。嫌悪けんお、憐憫れんびん、侮蔑ぶべつ、恐怖、

——そう云う感情の高低こうていは徒いたずらに彼の太刀先たちさきを鈍にぶらせる役に立つばかりだった。伝吉は浄観にらみを睨にらんだぎり、打とうか打つまいかと逡巡しゆんじゆんしていた。

「さあ、打て。」

浄観はほとんど傲然ごうぜんと斜ななめに伝吉へ肩を示した。その拍子ひようしにふと伝吉は酒臭い浄観の息を感じた。と同時に昔の怒のむらむらと心に燃え上るのを感じた。それは父を見殺しにした彼自身に対する怒だった。理が非でも仇あだを打たなければ消えることを知らない怒だった。伝吉は武者震むしやぶるいをするが早いか、いきなり浄観を袈裟けさがけに斬った。……

伝吉の見事に仇を打った話はたちまち一郷いちごうの評判いちばんになった。公儀こうぎも勿論この孝子には格別とがの咎とがめを加えなかったらしい。もつとも予め仇打ちの願書がんしょを奉ることを忘れていたから、褒美ほうびの沙汰さただけはなかったようである。その後の伝吉を語ごることは生憎あいにくこの話の主題ではない。が、大体を明かにすれば、伝吉は維新いしん後材木商を営み、失敗に失敗を重ねた

揚句、とうとう精神に異状を来した。死んだのは明治十年の秋、行年ぎょうねんはちようど五十三である。（註六）しかしこう云う最期さいごのことなどは全然諸書に伝わっていない。現に「孝子伝吉物語」は下しものように話を結んでいる。――

「伝吉はその後家のち富み榮え、楽しい晩年を送りました。積善せきぜんの家に余慶よけいありとは誠にこの事でありましょう。南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。」

（大正十二年十二月）

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utyama

校正：かとうかおり

1999年1月8日公開

2004年3月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

伝吉の敵打ち

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>